

千里山会・あつという間の四半世紀

十八回生 片山 章

一. はじめに

千里山会は、あつという間に二十年が経過しました。千里山東京同窓会と称していた期間を考えると、ほぼ四半世紀が走馬灯のように、過ぎりました。

この千里山会、考えてみると稀有の集合体だと思えます。世の中によくある同窓会でも無く、同期会でも無く、趣味・スポーツを共有する同好会でも無く、ただただ大阪郊外の限定された一地区の風景・雰囲気を共有する人々が、故郷と呼ぶ新興住宅地から、五〇〇キロ離れた東京で、三世代が談笑するという珍しいグループだと思えます。

また、構成人員の平均年齢も高く、それでも毎年数十人から百名の方が集うというのも驚きです。

更に、重要な点は、この小グループでありながら、毎年百数十頁の会誌が発行されていることが、永続性、求心力の原点であると思えます。

毎年発行される会誌により懐かしい雰囲気を確認し、知らなかった事実に驚き、変わりつつある故郷への思い出の灯を点燈されていると思えます。

私は、偶然にも今迄三十年勤めていた会社を退社し、新天地で再出発した時に、軌を一にして発足しお手伝いをしました。

第一回千二同窓会（池袋 小劇場 二つの部屋）での会計、第二回（銀座 京樽での会計・会場設営、その後、本格的な簿作成の整理、などの下働きを、柿崎さん（十四回生・事務局長）の指導で担当したことを思い出します。余談ですが、当時、柿崎さんとは、勤務場所のビルが隣り合わせて、緊密な連絡が可能であることが幸いしました。

そうした経過があり、立ち上げ期に下働きし見聞した事実、人物のアレコレを現世話人代表として書き残すことも意味があると考え記述を思い立ちました。

二、会の設立の源泉(思い)

「故郷は遠きにありて想うもの」思い出は年古りてこそ懐かしき」

創刊号の巻頭言に飯島泰蔵さん(九回生・初代世話人代表)が記述されていますが、この二文言に尽きるのですが、今一度借用して設立当初の思い出を新たにしたいと思えます。

丘の上には松林が茂り、所々に果樹園が開き、その先には竹林が雑草と共に生い茂っていました。春先の梅林に漂っていた芳しい梅の香り、爽やかな小鳥のさえずり、炎天下のヤンマの群、汗ばむ蟬の喧騒・・・秋風と共にすだく虫の声、野に広がるスキの穂並み、・・・(中略)
・・・今に心に残る数々の記憶・

この文章を私は、長い海外でのプロジェクトにいつも携行し、現地の風景にかぶせ、再見を想って苦しい時の支えにしてみました。

先祖伝来の故郷ではありませんが、我々世代には故郷そのものでした。

その個人個人が秘かに思いを温めていた時に、後述するようなキツカケと先輩の方々の努力で、一刻で崩れる砂上の楼閣でなく、四半世紀につながるユニークな会合

が設立されました。

その発展ぶりは驚くべきもので

東京同窓会第1回	池袋二つの部屋	33名
東京同窓会第2回	銀座京樟	75名
第3回	銀座あしべ	87名
千里山会 第1回	銀座ライオン	108名
第2回	〃	95名
第3回	大崎ニューオータニ	107名
第4回	田町ホテルJALシティ	103名
第5回	お茶の水ガーデンパレス	109名
第6回	〃	119名

第6回で百十九名の参加者を数えた時は、会員の参加率は楽に五十%を超えました。

正に、千里山の魅力が皆さんの胸に灯となって点燈し集われたものと思います。

いま一点、この集いには老若男女、通常はお付き合いが無くても、千里山は兄弟姉妹を通じて、各家の情報が共有されており瞬時に話題が湧き出て時間を忘れた会合になりました。

これは、代々の父母に感謝の一言です。

三、創設期に活躍された人々

このユニークな会合も、マッチを点火し、それを焚火状態にして、かつ火を持続する薪を供給する人が必要です。

また、会を永続的に続けるには、正確な名簿の作成と興味ある話題を提供する冊子(会誌)が必須で、この二つの態勢が整備されていないと、すぐ自然消滅します。

その点、千里山会は人材に恵まれており、火付け役は、一九九〇年代初頭、テレビ映画・演劇で活躍されていた福山博寿さん(十二回生)知られているのは、網走番外地、水戸黄門、アマデウスなどで活躍されましたが、一九九六年に急逝されました。

それを受け止め、その熱情と行動力で日夜努力された柿崎眞吾さんの努力が千里山会の基礎を固めました。

柿崎さんは、事務局と会誌の編集を共に受け持たれ、千里山ファーストの執念と熱情には、名簿作成のお手伝いだけを担当した小生から見ると、頭の下がる思いでした。

学会 敬称略

1. 飯島泰蔵(九回生、当会、初代代表)

工場自動化に貢献。東工大教授。パターン認識研究の第一人者。

2. 黒川高秀(二十一回生、当会代表)

東大教授 医学部長(整形外科)

次に同時期、千二小学校を母校とし、数々の分野で活躍された方々を紹介させて頂きたい。
昭和三十年代、週刊朝日の人気連載だった新日本拝見の、昭和三十一年一月二十七日に「千里山」が掲載されました。その記事には、千里山の紹介に、全体として知識水準が高く、教養に比して収入が低すぎると考えていた人々、即ちインテリ庶民層を中心に構成され、学童の成績よく、上級の一流校への進学も多いと記されています。

それを証明するかのように、昭和十年から二十年にかけて左記のような人材を輩出したので列記します。(但し、この他にも多数の方々がおられますが、私個人の交際範囲ということでお許し下さい)。

経済界

3. 藤田田 (九回生)
日本マグドナルド創始者 社長
4. 美川英二 (十七回生)
横河電機(株) 社長

音楽界

5. 保富康午 (十五回生)
NHKで活躍 大きな古時計 作詩

文学界

6. 筒井康隆 (十八回生)
SF小説三羽鳥の一人

演劇界

7. 福山博寿 (十二回生)
当会の仕掛け人

スポーツ界

8. 三笠洋一 (十四回生)
東大投手 (六大学で活躍 新日鉄釜石ラグビー全盛)

した。

ところが、皆さん人伝てに、第一回の会合が伝わっていたらしく、前述しました地縁と、兄弟姉妹の網が情報網となり、開催日迄参加希望者が届き、七十五名となりました。

会場は、地下の大広間に六十名を無理矢理着席して頂き、十八回生以降は、一階に二十名の中部屋を設けてなんとか間に合わせました。総会は、立錐の余地もない畳敷きの和室で、無事終了しましたが、和室に鳴り響いた井上敏三さん (六回生) のサクスの奏が圧巻でした。私は自社での開催で最後まで人員が増え続けた為、終了後にサービスの店長と総料理長から、懐石料理の品格とサービスを軽く考えていると、散々苦言を聞いたのも今となっては懐かしい、想い出です。

時間も超過し、年代を超えて交流していたあのふつふつと沸き立つ会合の雰囲気、それから続いた千里山会隆盛の基盤になったと考えています。

最後になりましたが現在は、事務局を奥田陽一さん (二十四回生)、会誌を萩原直大さん (二十七回生) が努力され運営されておりますが、将来の会運営について、會員

時代の部長

9. 南部敦子 (十八回生)
アジア陸上界のヒロイン

四. 第二回 千二東京同窓会

第一回の会合が一九九四年、和やかななかに、またの再会を約して終わり、一九九五年、時々柿崎さんのお話の中で第二回をどうするかの話をしていました。

そのうち、柿崎さんが、同期生の京榎会長オーナーの田中博さん (十四回生) と話をし、京榎のフラッグ店である懐石京榎を会場として提供することになり、当時、社長をしていた小生も、会計と会場設営を担当しましたが、想定外の参加人員の増加にドタバタしました。

詳細は、会誌「千里山」の二号に柿崎さんが記述されていますが、大広間とは言え懐石料理の提供場所なので通常は二十名が雰囲気を楽しみながら会食が最適の場所でした。それを知りながら第一回が三十三名の参加でしたから五十余まで着席出来るので大丈夫と安心していました。

開催日も十一月十八日と決定し、名簿の六十余名の方に案内状を出しましたが、内心は閑古鳥を心配していま

の高齢化に伴い数々の課題が表面化してきました。

このユニークで貴重な千里山会を持続したいと熱望する一人として皆様と共に智慧を絞りたいと思いますのでご協力をお願いいたします。

まだまだ千里山会草創期の逸話で書き残したことは多くありますが、最後まで舌足らずの文章をお読み頂き感謝します。